

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：33908

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21653068

研究課題名（和文）GPSを利用した親子の行動域の変化に関する生態学的研究

研究課題名（英文）Longitudinal study on home range of first-time mothers by using orbits of Global Positioning System.

研究代表者

小島 康生 (KOJIMA YASUO)

中京大学・心理学部・准教授

研究者番号：40322169

研究成果の概要（和文）：第一子を出産した母親8名の協力により、GPS機能付き携帯電話による位置情報、日誌、インタビューなどの方法を用いて、2年間にわたる外出のデータを収集した。出産から数ヵ月の間は外出の機会が少なく、自宅にいる時間が多かった。だがこの間、実家、親戚の家などへの外出、夫や実母同伴の外出により少しずつ“ならし運転”を行い、出産から4、5ヵ月目には、母子だけで出かける回数も増えていくことがわかった。生後2年目になると、育児支援サークル等に足を運ぶ頻度が増え、夫と子どもが2人で数時間にわたって外出する家庭もみられた。

研究成果の概要（英文）：Eight first-time mothers were asked to list the places they went outside from birth to age 2 of their young children. One of the mothers was also tracked on location by using Global Positioning System five consecutive days every month during 9 months from the birth. The data revealed that the mothers spent almost every day at home with their children during 1 to 2 months from the birth. For a while after “satogaeri” (their perinatal visit and stay with their parents), some mothers frequently visited their parent’s and/or relative’s home with their young infants. Also, during this period the mothers were likely to go outside with their husbands and/or their own parents (the children’s grandparents), perhaps showing “running-in period”. Afterwards while 4 and 5 months after birth, most of the mothers became increasingly to go to various places alone with their young infants. During the second years of the children, unemployed mothers became more frequent to participate in the child-care groups. In addition, some of their partners (the children’s fathers) sometimes went outside alone with their children for several hours.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	0	900,000
2010年度	1,300,000	0	1,300,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	240,000	3,240,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：GPS・日誌・生態学的視点・母親・子ども・外出・縦断研究・環境

1. 研究開始当初の背景

発達初期の子どもと親を扱った縦断研究はたいへん多いが、親子が生きる「場」がどのように変化し広がっていくのか、そうした生態学的な視点からの取り組みはほとんどなかった。筆者はこれまでも数年にわたって親子を取り巻く「モノ」と「ひと」の存在に注目してきたが、本研究ではこれらに「場」の視点を新たに加え、親子の育ち・発達に関する理解をさらに深めたいと考えた。

2. 研究の目的

子育て開始期の親とその子どもが生きる生活世界について、時系列に沿った「場」の広がり明らかにすることが目的であった。GPSを利用した母子の行動域のデータと、親自身の日誌記録によるモノやひととのかわりについてのデータを併せて収集し、親子が広くどのような生態的地位を確立していくか、その実態を把握することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 日誌およびインタビューによる調査

① 協力者と調査期間

第一子の出産を控えた妊娠後期の女性8名に対し、出産から2年にわたる縦断研究を行った。

② 手続き

所定の日誌を用いて、(ア) 子どものため(ないし子育てのため)に手に入れたモノ、(イ) 子どもと一緒に出かけ場所や出会った人、(ウ) 自宅を訪れた人、(エ) 子どもを預けて外出した場合の預け相手と子どもと離れていた時間等について毎日記録してもらった。1ヵ月に1度自宅を訪問し、日誌の内容について補足インタビューを行った。

(2) 母子の行動域の追跡

① 協力者と調査期間

上記8名のうち1名に対し、出産から子どもが9ヵ月になるまで調査を行った。

② 手続き

GPS機能付き携帯電話を貸与し、毎月、平日・休日を含む連続5日間、朝8時から夕方6時までの行動域調査を行った。この間は外出時この携帯電話を必ず携帯するよう依頼し、30分ごとで衛星機能を使って母子がどこにいるかを特定した。自宅訪問の際に、その地図上の位置を見ながら、どこで誰と何をしていたか確認した。

4. 研究成果

(1) 9ヵ月頃までの特徴

① 日誌データについて

協力者8名中5名は、出産から1～2ヵ月の里帰りを経て自宅に戻った。退院以後の外

出の状況をみたところ、子どもと一緒に初めて外出した日は、退院翌日が1名、2日後が2名、それ以外は22～31日後であった。初めての外出先は病院であることが多かった(5名)。1ヵ月程度、里帰りをして自宅に戻った5名については、里帰り中は平均6日に1日の割合で外出しており、この5名は多少の個人差はあったものの、出産から3、4ヵ月にかけて外出の頻度を増していった(例えば、図1)。

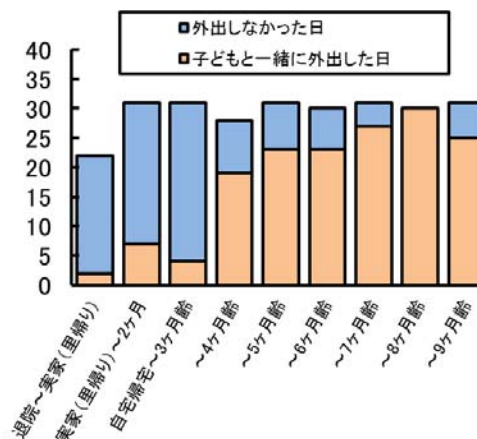


図1. 子ども連れでの外出の頻度

里帰りしなかった2名は、出産後1ヵ月まではほとんど外出がなかったが、出産後2ヵ月頃にはよく外出するようになり、その後も3日に2日程度の割合で子どもと外出していた。なお、外出の頻度はこのように増えていったものの、子どもから離れて母親だけが外出することは非常に少なく、出産からかなりの期間が経過しても、24時間子どもと一緒にいるケースが多いことが明らかになった(図2)。

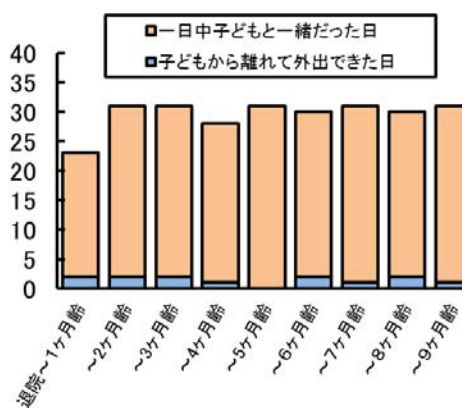


図2. 子どもから離れての外出

子どもと一緒に外出するときの同伴者について分析を行った。3ヵ月頃までは、夫ないし実母が同伴することが多かったが、それ以後は母子だけで外出する割合が増加し（例えば、図3）、少なくとも子どもが5ヵ月齢になるころには、3日に1日程度は母子だけでの外出がみられた。

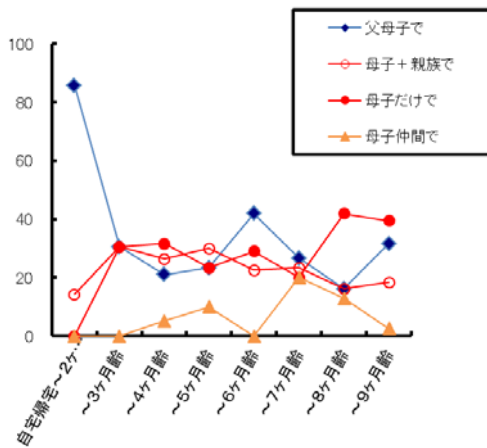


図3. 外出の同伴者

外出先については、里帰りのあと自宅に戻った5名については、ほとんどがしばらくは実家（ないし親戚の家）によく出かけていた（例えば、図4）。自動車が運転できず、かつ実家が徒歩圏内になかった1名だけは、自宅に戻ったのちも実家に出向くことがほとんどなかったが、実父母が週に1~3回程度、母子の自宅を訪問していた。

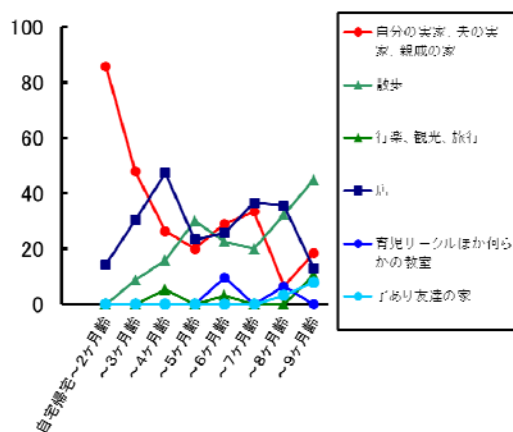


図4. 外出先の変化

②GPSデータについて

先に述べた特徴をより詳細に検討するため、GPSデータの分析を行ったところ、出産以後1ヵ月までは自宅周辺への外出が多数を占め、外出時間も短時間であることが多かったのに対し、出産から3、4ヵ月以後は、自家用車での外出が増え、移動距離も数百キロを超えるものがみられた。外出の頻度が増えるのと同時に、移動距離も増えることが確認された。

(2)9ヵ月以後の特徴について

これ以後、外出の頻度は1歳頃にかけては、いずれの協力者においてもますます外出の頻度が増していくことに加え、育児サークル、幼児教室等、社会的な刺激を子どもに与えることを見通しながら、母親が率先して様々な場へと子どもを誘導していく様子が示された。

さらに1歳半頃になると、地域のプレ幼稚園等に出かける頻度も多くの家庭において増えていくことが明らかになった。幼稚園への入園を控えて、母親が様々な情報を参考に、積極的に子どもの発達環境の準備を進めていくことが明らかになった。またこれに加えて、夫（父親）と子どもが2人で外出するということがたびたび確認されるようになり、母親の行動の自由度は増していくようにみえた。

全体をまとめると、出産からしばらくの間は親子が外へ出ることがたいへん難しく、子どもと一緒に外出しはじめるのは、里帰りをした人もしなかった人も、出産から1ヵ月程度たってからのことであることがわかった。

はじめのうちは母子だけでの外出はほとんどなく、夫や両親など身近な人と一緒であることがほとんどで、さらには母子で外出する場合の外出先も実家に集中している人が多かった。身近な人、実家など比較的気楽に行ける人、場所、そして自動車をはじめ移動を助けるモノの助けを借りながら、母親は少しずつ行動範囲、生活の場を広げていくことが示唆された。

やがて子どもは、親によって整備された社会的環境を足がかりにして生活の場を確立し、また親も次第に子どもに拘束される時間を調節しながら、子どもに離れたり近づいたりを繰り返し、互いに独自の生活世界を構築していく見通しが本研究から示された。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①小島康生、子育て家庭におけるモノ環境の構造的特徴—第一子の生後1年目における縦断的日誌調査から—、こども環境学研究、査読有、7巻、2011、26-32

〔学会発表〕（計1件）

①小島康生、子育て開始期の母親による子ども連れでの外出の縦断的検討、日本心理学会第74回大会、2010年9月20日、大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小島 康生 (KOJIMA YASUO)
中京大学・心理学部・准教授
研究者番号：40322169

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：